
ツータッチ・ファンタジスタ

ばるでら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツータッチ・ファンタジスタ

【Nコード】

N8995F

【作者名】

ばるでら

【あらすじ】

彼女は全く守備をしない。

彼女はボールをもらいに走らない。

彼女は試合の99%を歩くかボーっと立っている。

彼女はワンプレーにつき最高二回しかボールに触らない。

ただ彼女はうちのチームの10番で、紛れもないファンタジスタだ

ラノベチックです。携帯の方、文字サイズは極小に。地の文少なめで書いてます。

ぐだぐだやります

ACT・0（前書き）

女子が出れないとかは推測でやってるんで実は出れたらごめんなさい

ACT・0

右サイドベンチ

それがうちの中学のサッカー部の7番を背負った奴のポジションだった

まあいわゆる万年補欠って存在のアイツは公式の試合の度に相変わらずブスツとした表情ながら（アイツはどんな理由であれ試合にでれないと不機嫌になる）

例えば大体一年前あった中学最後の大会みたいな気合いの入る大会はいつもよりどこか歯がゆそうにそこに座っていて

そんな日はいつもに増して声を出して応援していたと思う

そしてその逆サイドに同じく常に陣取っていたのが俺

そして半幽霊部員の俺も万年補欠

二人そろって不動のサイドバック

……すこしむなしい気がするのは気のせいだって信じたい

俺の場合は幽霊プラス単純に実力不足

俺は幽霊なのに生まれつきの才能なのか、足だけは誰よりも速いが代わりにミスる

ハンパなくミスる

こないだお情けに出してもらった練習試合で俺はその煌めく俊足を生かしてオフサイドラインを抜け3回キーパーと1対1になった

焦った。うまくいきすぎて

結果全部シュートはボテボテ真正面

ドリブルは一人目は無理やり速さでかわせるがボールを見なきゃドリブル出来ないのとタッチが大きすぎるとで二人目がかわせず使えない

一人目かわせるならキーパーかわせば良いと言ってくれるな
俺みたいにスピードだけでボールタッチは素人な奴にはキーパーをかわすって結構難しいんだぜ？

ポストプレー？チビで足下のない俺に何を求めてんだお前

シュートとパスの精度だけは後述する強制夜間練習のおかげでそこ
そこあるが

そんな物はトラップの悪さでたちまち台無しだ

もちろん幽霊だからスタミナの無さは半端じゃないＺＥ

……まあ、ようは使えないＦＷって奴なのだ

それは２３つていう最高学年にしちゃ大きすぎる背番号からもよみ
とれるはず

俺が不動の左サイドベンチ

コレはなんの不思議もない

ただ、反対サイドのアイツに関しては少しばかり事情が違う

アイツは俺と違ってテクニクで劣る訳じゃない

それどころか上手い

ボールが友達になりかけている

アイツは毎日毎日部活が終わった後、帰宅し、飯を食った後近所に住む俺を外に引っ張り出して（幽霊気味部員の俺としちゃ非常に大変不本意）練習するのが日課だし

どうやら俺との練習を終えた後も走り込みなんぞやってるらしい

その日々の練習の成果かアイツは部内で一番ボールと『仲良く』で
きる存在だ

だからといってフィジカル面で問題があるわけでもない

そりゃあ他の部員と比べたらかなり非力だし、足もそんなに早くない

ただ、持ち前のボールコントロールと体重の掛け方、そして生まれ持った武器を利用したフェイクでスルスルッと抜けていくアイツにさほど筋力はいらないのだ

テクニクに長けたプレイヤーにありがちなように守備意識が低い
って事もない

スタミナは無尽蔵なアイツはボールを取られたら追いかけて回す
悔しがる子供……のようにかわいらしくではなく敵に食らいつく涎
まき散らしながら走る獰猛な闘犬のように

そんなアイツに大半の奴はびびってボールを投げ出す

いや、ホントに

俺が日々体験してるから間違いない

そんなアイツは練習試合では非常に重宝されるのだ

主なポジションは今更ヨーロッパの流行に乗っちゃったつもりなの
かも分らないが、最近（入学当初はフラット3フラット3言っ
た）うちのデブ顧問が唱える4-3-3ワンボランチの右ウイング

かつてバルサで名を馳せた、フリスト・ストイチコフ（アイツが自分でそう称していた。てか誰だよ。ストイチコフって）のごとくサイドを切り裂く

ただ、ストイチコフのようなスピードが無いので目下ヨッシ・ベナユンのドリブルを参考にしてるらしい（もって誰だよ）

……まあそんなこんなで自らのプレーに飽くなき向上心を持ったアイツはうちの地区のレベルだったら単独で局面を打開できるって存在だ

そしてアイツは背番号7を背負う

まあ俺にとって背番号7っていったら猪狩カイザーズの友沢亮なんだけれど

やっぱり背番号7は俗に言う司令塔の10やストライカーの9とかとはまた違ったエースのような雰囲気とするものらしく、顧問がアイツに背番号7を預けるってなった時、満場一致で賛成ムードだったためかアイツはとても嬉しそだった

で、ここで最初の右サイドベンチってどういうことなのかってなると思う

テクニクも意欲も体力も仲間からの信頼もあるアイツがなぜ、試合に出れないのか

それはアイツの名前を聞いてもらえばわかるかもしれない

手束千明、それがアイツの名前

そう彼女、千明は正真正銘の女の子なのだ

しかも割と美少女呼ばれるたぐい

物心ついた時から幼なじみとして見てきて、すっかり見慣れた俺でさえもそう思うんだから多分他のヤツらはもっとかわいく見えるだろう

千明が試合に出れないのはどうやら女子は女子でサッカーの部があるらしく、女子サッカー部なんてうちの中学には無かったから

かといって男子の大会には基本的に出場は認められない
だから大きい大会ではいつも千明は右サイドベンチに座っていた

そして千明はいつも悩んでいた

だんだん骨が太くなり、筋肉がついてくる周りのサッカー部のメンバーに反して日々女らしくなっていく自分の体

たまに感じてしまうらしい性別の違いからくる身体能力の決定的な差
そしてその差は縮まらず少しずつ、だが着実に広がっていく

いくら千明が気丈ゆえの練習量をこなすからといってもこればかりはどうすることもできず、近くに女子サッカーができそうな高校も無いため中三の最後の時期にはもうやめようとさえ思っていたらしい

そしてそんな時期に、千明がひとりの先輩に出会うことから物語は始まる

その先輩は真つ黒で長いボサボサの髪を結わえつつ、いつも眠そうにしながらさも当然のように男子の試合に出る

そして彼女は一度全てのタイミングが揃えば、二回ボールを触るだけで相手のディフェンスをズタズタにしてしまう

そんな彼女はいつも背番号10を背負っていて――

――そして彼女は紛れもなくファンタジスタだった

ACT・i（前書き）

不覚にも前書いた2話を消しちゃったので続きから乗せることにしました

ACT・1

衝撃、だった

衝撃といっても特別何をしたってわけでもない。言葉にするなら尚更だ。ただ、ディフェンスをかわすようにトラップして、動き出した選手にパスをし、そしてフリーだからシュートをしただけそれは全てプレーヤーである以上求められる基本的な動作だ

ただ、彼女の場合はその全てが美しすぎた

今も彼女の動きが目に焼き付いてしまったかのように、離れない

少しバウンドした後方からのパスを背後からチェックに来たマークマンの頭上を越すようにボールを浮かせながら振り向き様にトラップし、体を当てられる寸前に左足で出したパスは計ったかのように飛び出していたFWに見事に合い、キーパーとの1対1をFWは冷静に決めそれでまず一点

そしてCKのこぼれ球を全員が騙されるようなタイミングとフォームでキックフェイントをかけ

騙された相手側のハーフが足を引っ掛けてしまいPK

それを彼女は人に譲り任されたキャプテンマークを巻いていたCBの選手が決め2点（キャプテンがPKを蹴る間、彼女は心底だるそうに首を回し、伸びをしていた）

そして極めつけはマークの薄いサイドに張っていた彼女はボールを受けるFWにパスをだす。そしてサイドバックの視線が一瞬外れた瞬間にその日初めてといって良いダッシュを見せFWとワン・ツ

ーで半歩抜け出すとペナルティエリアの正に隅、右側の角から左足のダイレクト。インフロント（親指のつま先あたり）で擦るようにボールを蹴った

回転のかかったそれはまるで意志を持っているかのようにキーパーの手の先で最も離れ、そして緩やかにしかし確実に曲がりバーの内側に当たりゴールへと吸い込まれていき3点

（このゴールは前に見たことがあるような気がしたが、後々千明と話していて思い出した。サイドこそ違えどあれは何回と千明に見せられたスーパースーパーゴール集には常連のアレッサンドロ・デルピエロのデルピエロ・ゾーンからのシュートそっくりだった）

計三点、県大常連校らしい相手から、地区屈指の弱小校が取った点数だ

ただ、試合は3 - 4で負けていたが、それでもあの試合の主役は屈指の弱小校の10番。黒く長い髪を軽く束ねた、おそらく女の子（しかも結構かわいいというか綺麗）で、もしかしたら今大会一番人を魅了したのは彼女かもしれない

そして彼女のプレーに魅了されながら俺の頭の片隅では千明がいつも言っていたファンタジスタの定義をふと思い出していた

私の考えるファンタジスタってさ。テクニクとか意外性とかがどうこうっていうより、『ああ、こいつに任せれば俺達はほんの少し手伝ってやれば大丈夫だ』って思わせるプレーヤーがファンタジスタだと思っただよね――

今、俺達、というより千明の目の前に居るのは正にそんなプレーヤーなんじゃないだろうか

じゃあコイツは、さっきあんなとんでもねえ事を口にしかけた千明は今、どんな顔をしてるんだろう

そして俺は言葉を忘れてしまったかのように40分以上黙り込む千明の表情を伺おうと横を見る

うつむき気味なための垂れた前髪から僅かに覗くその表情は

諦めかけた夢を正に目の前にした千明の顔は――

ACT・0・5（前書き）

突然ですがむしろオードリーは若林派です

点が取れそうなのに取れない、なんて事はサッカーにはよくあることだ

カウンターを狙うチームなんかはあえて相手にそんな状況に持っていき前掛かりになっている所を狙ったりする

こういう流れを作るにはいろいろあるが最も単純かつ効率的なものといえばやはり守備の人数を増やすことだろう

守備の人数が増えると余裕を持ってボールを持てるスペースが減る。パスを出すスペースも減る

なので相手陣のスペースをつくことが攻めの基本のサッカーでは、パスを回す等でいかにスペースを生み出すのが重要になってくる

それで俺達の中学（と言っても俺以外だが）はそれを意識してやってきた

やる気とそこそこの知識だけはある顧問の元

ダブルヘッダーなんざ当たり前前の死ぬほど組まれた練習試合（休みもないのに誰も辞めなかったのは8割方千明が居たからじゃないかと思う）では徹底的にそれを意識してきた

で、その技術はこれまたそこそくに身に付いたはずで、今回の大会で存分に発揮されるはずだった。ただ、想定外だったのは

「あー！！畜生！！なんなんだよこの雨はよお！！！」

うちのスタミナ切れで交代のMFが退場際に毒づいたように

俺達持ち前のパスワークをただの玉蹴りにしてしまい、俺達の努力をぜんつぶ流してしまうかのような雨だった

あれから18時間後

空は澄み渡るような快晴だった

「……タイミング悪いっつの」

と、隣の千明のぼやきはどこかに吸い込まれていき、聞こえるのは昨日たつぷりと水分補給し輝きを増した……かどうかはわからないがキレイな新緑のグラウンドから聞こえる声とランニングの掛け声ふと千明は横のこちらの道が土手のような高低差で作られているグラウンドをみる

芝のグラウンドは前日の雨が降ったからって試合が壊れる、なんて事はない

ピッチでプレイしている高校生達は、濡れている故の玉足の速さに戸惑いながらも、しっかりとサッカーしていた

「私達も芝だったらなあ……」

と、再びの千秋のぼやき
俺も今度ばかりは賛同だ

芝のグラウンドだったらまだましだったに違いない

少なくとも水はけが悪く、土というより泥となったグラウンドよりは遙かにだ

一面の水たまりにボールが浮いているようにも見えるピッチで言葉通りの泥試合となった昨日の試合は0 - 1で敗北

その一点は本当にボテボテのラッキーゴールで、実力で打ち砕かれるよりはるかに悔しい敗戦となった一番悔しそうだったのは試合直後からずーっとブスっとしてる隣のこいつ

もうサッカーやりたくねー。と思わせるぐらいの泥まみれになったみんなの片づけを率先して手伝いながらも、表情は誰よりも不機嫌

その表情にビビった一年にフォローを入れる羽目になった俺の身にもなれ……と言いたところだが、千明の母さんの愛梨さん（彼女はハーフで愛梨はアイリンのもじり。つまり千明はクォーター）によれば昨日は晩飯も食べずに部屋にこもっていたらしい。まあ、サッカー命で部員とも何だかんだで仲のよかった千明にとっては相当シヨックだったのだろう

それでもせつかくの休みを使ってまで高校生の試合を見たいってのは、もう立ち直り前を向いてかはたまた高校生に自分達の影を重ねて……か

まあどちらにしろ一人で見に行くというのなら結構なことなんだけれども、どっこいそうは行かしてくれないのが千明さんで、俺はそれを良く知っていて

「……なあ、俺来る必要あったん？」

そりゃ、こんな疑問も生まれてきたりもするのさ

「無いかも。けーじも呼んでるし」

「ねえのかよ！ーじゃあ返してよ！ー俺の麗らかな、云うなれば口
ーマの休日を！ー」

「何いつてんの？今日ラツイオとダービーじゃん」

「なんでもかんでもサッカーネタに持ってくなよ。そこはお前は春
日か！？だろ」

「オードリーだから？……つまんねー」

「……いや、もう少し優しい反応を……」

「確かにあの若干の気持ち悪さは通じるものがあるかも」

「お前俺のこと嫌いだろ……」

「馬鹿。嫌いだったら今日呼んでないから」

「……………」

「……………」

「「えへへえっ」」

無駄すぎるコンビネーションにはあ、ふう。と二人で溜め息をつき
合った後

ますますもって疑問な俺の存在意義について聞いてみる

「圭司も来んのになんで呼んだんだよ」

そもそも今日俺が呼ばれた理由は『なんか一人じゃ心細いから……』
というしおらしすぎる理由だったはず

「えー、なんか幼なじみ同士仲間外れはかわいそうかなーって」

「うわー。いたみいるころづかいですねー」

あまりの優しさっぷりについつい棒読みになってしまった俺を横目で見た後

なんとなくバツが悪くなったのか、千明はネタばらしをした

「ていうかね、けーじが呼べつつつてきたの」

どこか呆れた……というかどうでも良さげにそんな事を言う

「はぁ？圭司が？」

との聞き返しに千明は頷く

「今までひとりだけ違う中学で寂しくかったから、たまには三人が
良いんだって」

俺と千明と圭司は物心どころか生まれた時からの幼なじみで

俺と千明の家は並んで、道を挟み向かいに圭司の家

同年代の子供の居る家が歩いて3秒の範囲に3件あるなんてミラクル
だけではあきたらず、なんと間の道を境界にして学区が違ったため、

圭司だけ違つ中学というほとんどギャグな幼なじみ関係

……普段から寂しい寂しい言つてた圭司だが、改めて思う

「気持ち悪っ」

「だよねえ」

と、千明と頷き合いながら歩いていくと行く先にアデイドスのジャージを着て満面の笑顔で手をふる圭司が見えた

先程のオードリーのやりとり並のシンクロ率を発揮しながら、千明と俺は心の底から思ったことを口にした

「……気持ち悪っ」

ACT・0・75(前書き)

長
い
っ
す
!!
無
駄
に
!!

ACT・0・75

俺と千明と圭司は基本的に仲が良い。というか、かなり仲が良い
三人暇なら三人でどっか行く事もザラだし、どっか行かなくても誰
かの部屋でダラダラしてるのはもはや日常の一部だ

でもってなぜかみんなサッカー部
ここまで来ると我ながら変だと思う

だが、そんな俺達にも一応企画担当というか集合をかけるのは決ま
っていて、それは基本的には圭司

まあそんな感じで俺達の幼なじみ関係のいわば扇の要な圭司だが

俺と千明はこれまた基本的に圭司に冷たい。なぜなら

「おっせえよ二人とも！！俺達の友好を深められるこの時間を少し
でも長く楽しみたいとおもわねえのか！？」

うるさいから

「いよう！！今日も頭は大泉してるな！！これから呼び名大泉にす
つか！？」

あとデリカシーないから

「うるせえ。しね。てめえ天パバカにすんなよ」

「いよう！！今日も目つき最悪だな千明！！」

「黙れ、お口にチャックしてチャックかみ合わなくなつて開かなくなれ」

「……あぁっ!!愛する幼なじみ達が冷たいっ…………!!俺、ゾクゾクしちゃう!!」

んで筋金入りのドドドMだから

本意気でエクスタシー感じちゃってる圭司はスルー

「つーかお前が来るのが早い。ひとりで前乗りとかどんだけ楽しみにしてんだよ……」

「あん?何言つてんだ大泉。今日の集合はこの時間にここだろ?」

大泉で固定ですかそうですか。おまえ後で裏……………まで、ここ集合?

「……いや、今日は愛梨さんに送ってもらってから千明ん家集合だったんだろ?俺はお前来るつてのは今知ったけども」

この会場は自宅からけっこう遠く
来るとなれば車か電車

仮に電車となると往復で千五百円をオーバーしてしまう

親のすねをかじりつつも慎ましく生きる俺たちにとって千五百円は大金だ。漫画三冊は買える

そこで愛梨さんが特に俺の財布事情を察して、車で連れて行ってくれることになったのだ。が

「……聞いてねえぞ」

あ然としている圭司の表情はコイツが本気でびっくりしている時の顔で

……どうやらホントに聞いてないらしい

「マジか。……お前何で来たの？」

「電車」

「金は？」

「自腹」

「………」

自然と俺と圭司の視線は千明に

千明はこの間買って貰ったらしい携帯（ほんと田舎の中学生のくせに携帯とかないわ……。ひ、僻みなんかじゃ無いんだから）を力チカチしながらものっすごい片手間げに

「なんかねー？愛梨ちゃんが『けーちゃんはそのういうキャラでしょ？』とか言うから、あー、それもそっかって思ってたさー」

とか言う。いや、せめて圭司の方向いてやれ

それを聞いた圭司はしばらく停止した後ゾクゾクと震え

「さすがに感じてねえよ大泉！！そこはゾクゾクじゃなくてわなわなと、だ！！わなわな！！」

どうでも良いとこで人の心読むんじゃねえよ……
やっぱ金に関しちやMじゃいらねえのな

俺に対してサイキックを使いつつこんだ後、圭司はムンクの叫びよろしく頬に手を当てながらほあああと叫んだ

「まああじいいえええ！！？？じゃあ何！？我が塚田圭司軍最後の大隊の野口少佐は何のために散っていったの！？」

……千円が司令官な状況なんかお前の財布
そして散ったのか。全滅か

ドM軍総帥の決死の叫びに我が千明大帝国総統閣下は携帯をパチンと閉じなさと

「大丈夫だ。君の野口部隊は人々の為に……。ああ、あれあれ。……っと……。あの線路の下の木、なんだっけ？」

「枕木な」

「あ、そうそう枕木に変わったりするかもしれないから。枕木、ヤツらに任せれば大丈夫。野口君達も上手くやれるよ」

「嬉しくねえ上にお前どうでも良さげ過ぎっしょ！！んでなんなの
その意味不明な枕木に対する信頼！！」

「ほらヤツら地に足が着いてるから」

「俺の財布は底をつきました!!」

「つとにうるさいなあ。けーじのドドドMの誇りはあれなの？金に負けんの？そんなもんだったのかけーじの信念は!!」

「つつ!!………ってショックうけるわけあるか!!」

なんか楽しそうな二人は置いて俺はちょうど目の前にあった大会本部のスケジュール表へ

千明と圭司もギャーギャー（主に圭司）言いながらこっちに来た

高校生ばかりの会場で中学生っぽいヤツらが一番騒いでるこの状況は嫌でも注目を浴びてしまい、周りの高校生の視線が痛い

まああんまり気にしてもしようがないし、スケジュール表を見つつ、千明に今日の予定について聞いてみる

「で、どの試合見るんだ？てきとーに見んのか？」

すると千明は少し悩むようにした後

「あ、これ見たいかも。この山ノ目高校ってとこ。強いんだって」

なぜか高校サッカー事情にも詳しい千明さんによると、この山ノ目高校は今でこそ県大で一〇二回戦あたりが定位置の県大常連のそこそこのチームだが、昔は全国の常連らしい

「相手は……黒商だつて」

「半女子校のどこじゃん」

黒商はホントにそこそただけ頭の良い高校

事務会計やらパソコンやらがメインの高校の為男はおとなしめ、女
いっぱい男女比1：3のちょびつとハーレムっぽい高校
部活についてはわからない。というか聞いたことない

「黒商って強いんか？」

それで千明に聞いてみるが

「弱いんじゃない？男少なくて毎年部員ギリッギリらしいよ」

との返事。緊迫した試合は期待しない方が良さそうだった

と、突然

「なに！？黒商！？」

「っ！！」

耳元で圭司が叫んだ

あまりの音量に脳がストライキ起こしたのか耳がキーンと鳴って音が
が周りから入ってこなくなる

「うっせ、耳キーンってなったる！！」

圭司は俺の当然の訴えはまるで聞こえていないように

「こないださあ。あのクズ兄貴が試合にスパイク忘れたとか言いやるから――」

と続けるからカチンと来て圭司の太ももの前の部分を軽く膝で蹴った

「!!!!!!!!!!!!!!」

ももかんと呼ばれるこの状態に陥るとまず立てなくなる。そして痛い。ものすごい痛い

あんまり強く蹴ると笑えない事態に発展するヤツなのでごくごくやるーくやったのだけど

どうやら当たりどころが悪かったようで、圭司しゃがみ込み太ももを撫でながら、さっきのムンクより悲哀のこもった声ではおおおと奇声を発していた

「で、なに？よっさんがどうしたって？」

よっさんとは圭司の2番目の兄貴。カッコ良くノリの良い人なので親しみを込めてよっさん

圭司がサッカーを始めたのは千明ではなく、この人の存在が大きいそれは千明にもいえるがそいつはまた後で

「大泉、てめえ……………」

「んだよ」

「ちょっと気持ち良かったじゃねえか……」

「……………」

ドン引き

「で、なんなのけーじ？よっさんがどうしたの？」

あんまりくだらない会話でさっぱり話が進まないものだから千明が
方向修正

圭司はまだ太もを抑えつつ足に力を入れるとき切ない顔をしながらも立ち上がり

「ああ、んで練習試合に兄貴のスパイク持ってったら相手が黒商だったわけよ」

「で？」

と相槌。会話はテンポが大事

「で、ついでにちょっと試合見たんだけど黒商に髪ボサボサだけどころかなりかわいい女の人が居てよ」

「マジか？それ早く言えよ」

と、食いついた俺に気を良くしたのかどこか圭司は得意げに

千明はなんか生あたたかい目でこっちを見つつ

「ハイハイ、じゃあそのかわいいマネージャーさん見るためにもさつさで行こう?」

と、歩いて行こうとするが

圭司は

「まてまて俺の話は終わっちゃいねえ」と千明を引き止める

千明は、はああとため息をつきつつ振り返り

「なに?まとめて言えば良いのにめんどくさい奴だなあ……」
と辛辣なお言葉と態度

それでもいつもならそこで気合いで負け引き下がる圭司がどこか堂々としてるのはよっぽど話のネタに自信があるのか何なのか

圭司はその自信そのまま余裕を持って

「その黒商の美人さんな?試合出てた。しかも10番」

「……………はあ?」

山ノ目対黒商の試合会場にはほかの会場の2倍くらいの観客が集まっていた

そこそこ強豪な山ノ目の試合の見物人も多いと思うが、それ以上に

「ホントに居たな……」

「ホントに居たね……」

「なあ？いたろ？」

あの黒商の10番の噂が出回っているからかもしれない
隣で見ている人達も『マジで居た……』とか俺達と同じ様な反応し
てるし

練習試合にもちよこちよこ出てたらしいから結構有名なのかもしれ
ない

「……あつちなんか揉めてんな」

スタメンを提出するところでは黒商の監督……というより顧問の先
生っぽい人がと審判と揉めていた

「ああ、なんか『ありやどう見ても女でしょ!!』とか『いやいや
あれは男ですよ。体が少し乙女チックに育っただけです』とか言っ
てたぞ」

「むちゃくちゃだなオイ」

そんな感じで各方面から注目の10番さんはまるで寝起きみたいな
けだるさを醸し出しながらアップしていた

その様子を見ていた千明はどこか無表情に

「あの10番さん上手いの？」

と、圭司に聞く。その声はどこか不安げにも期待しているようにも聞こえた

そんな微妙な声の変化を感じ取ったのか圭司は特にふざけもせず

「んーや、あの試合はたぶん一回もボール触ってねえ。人数合わせかなんかなんじゃねえの？今だって11人しか居ねえし」

と、だけ

確かに黒商は10番合わせて11人しか居ない。サッカーのルールでは一応8人いれば試合は出来るがいないよりマシということなのかもしれない

圭司の言葉にそっか……とだけいった千明はしばらくうつむいた後俺の方を見て

「ねえ大泉」

いやいやいやいやまてまてまて

大泉じゃないから、そのボケは結構リアルに勘違いされるからてか、あれ？俺作中マジで大泉固定？そんなに、くるくる……？

そんな自己葛藤は千明に届かんかったのかどこか真面目な感じで

「今日さ、私が見に来たいって言った理由……大泉には言ってなかった、よね？」

なんて言うもんだから俺もついつい大泉は聞こえなかった振りして真面目に

「そーいや、聞いてないな」

などと返してしまつて

場の空気がまるで布が水を吸っていくみたいに少しずつ重くなっていくのを感じながら、俺は次の言葉を待つ

「私ね？……今日、諦めに来た」

千明の声はわずかにだが震えていてこれから口に出す何かを怖れているような、口に出してしまうことを怖れているようなそんな、声

「……なにを？」

俺だつて予想はついてる。予想はついてるけど千明の口からなんて聞きたくない

「私、高校入ったらサッカー止めようつておもつて——」

あんな楽しそうにサッカーする奴からそんな言葉、聞きたくない

「——さて、それ以上言うな。お前の言いたいことは分かってる。だからそれ以上口に出すんじゃない」

「だめ。……聞いて、けーじと大泉に言ったら私ふんぎりつく気がするし」

……なんて辛そうな表情してやがる

千明の後ろの圭司も思いつめたような顔をしていて

……こいつもこいつでどうすれば良いかわからなかったのだろう

「させねえために言っただよ。……アレだろ？女じゃ通用しないとか決めつけてんだろ。中学でもなんだかんだでさんざん吹っ飛ばされてたからな」

ピッチに出ている以上、男か女かなんて関係ない。相手が本気で千明にタックル使用が責める筋合いはない
ただ、一回吹っ飛ばされる事に現実を思い知っていく
どうしたって越えられない壁だってこの世にはあるのだ

千明は少し戸惑うようにした後、躊躇いながら頷く。自分で自分の限界を決めてしまうようでイヤなのだろう

「要は可能性が欲しいんだよな？」

千明は頷く

「目標が、欲しいんだよな？」

千明は頷く

「本当は死んでも諦めたく無いんだろ？」

千明は、頷く

当たり前だ。コイツは人生の半分はサッカーだったのだから
なら、まだ諦める事なんてないはずだ

「だったらあの10番にかけて見ようぜ」

「で、でもさっき圭司がっ」

「お前、ただの人数合わせに10番なんてやんのか？たえ囃だとしてそいつに10番着させて恥ずかしいとか思わないのか？やつちやいけねえ重みがあるだろ」

「っ……………」

千明は押し黙ったように何もいわない。いや、きっと背番号の重さを知ってるコイツだから、何も言えない

「俺は10番って背番号に賭けてやるよ。あの人は絶対にすげープレイをしてくれる。弱小校の域を出ないかも知れないけど、それでも輝いてくれる。エースだからな」

「……………」

「まあ、もし全然通用してなかったら」

「……………してなかったら？」

そして俺は笑顔で言う

「俺と一緒に、弓道しようぜ？」

「……………た」

スッパアアアアン

「告白か!!」

ななななな、なに!!? 何の攻撃!!? なんのスタンド!!? なんの念!!?

目の前にははりせんを持った圭司が
はりせん!?

「てめえ!! 圭司何しやがる!! 俺の一生に一度のエンジェルスマ
イルを!! 空気読めよ!!」

「うつせえ!! 俺を空気がたいにしがって!!……クルクル。
俺と一緒に、弓道しようクル? だあ!!? ふざけんな!! しかも弓
道かよ!! なんかチョイスおかしいだろ!!」

「クルクルーなんて言ってねえよ!! 勝手に天パの妖精さんのキ
ヤラに格上げせん!! 弓道なんはバスケって言おうとしたけど
アレも男女別れるからだよ!! てか球技系男女別れすぎだよ!!」

「……いや、最後のツツコミは要らない?」

「勝手に二人で盛り上がりやがって!! 俺も入れる!! 俺も弓道す
るから!!……俺達、どんなときでも三人一緒……だろ?」

「圭司……」

「けーじ……」

「うんうん。今の言葉心に響いたろ? わかるわか」

「「気持ち悪い」」

「ええええええええ」

「でも、確かに三人でって悪くないな」

「うん。それは言ってる」

「だ、だろ！？いつも三人なかよ」

「ま、嘘だけどな」

「ま、嘘だけどね」

「嘘かよ！！ひでえ！！けど、それがイイ……」

「「……………」」

ドン引き

ふと、グラウンドの方を見るとアップから上がってくる10番さんがこつちを見てクスクス笑っていて

もしかしたら全部聞かれてたのか……？

そんな声大きかった……？

と、ちょっと不安げに鳴りつつ、なんとなく礼をしてみる

10番さんは俺の礼を見てにつこり笑うと親指を立ててベンチに入っていた

「……………なに通じ合ってたの？」

「いや、なんとなく……」

そして俺達はその試合、魔法使いを見ることになる

人々の魅了し、少女の悩みを全部消し去る魔法を使う。そんな魔法使いを

ACT・入試3週間前（前書き）

特に劇的に話の展開とか無いです

ACT・入試3週間前

「だからね？私はこう言ってやったの。『ダブルシザーズにトリプルシザーズ？漫才には興味は無いね』ってさ」

「……すまん。そのフットボールジョークは俺にゃあわからねえ」

「えー……。こんなエスプリの効いたジョークなかなかないって」

「あ、俺はわかるぜ千秋！！イギータだろ？やっぱりサッカーを愛する物同士通じあうなっ」

「あ、うん。まあ、あんたには聞いてないけどね」

「……………」

チーンという音が聞こえてきそうな場の空気を一つの区切りとして、20インチのブラウン管のテレビをビデオ2から回すとお昼休みのウキウキウォッチン〜というある種お昼の時報と化したオーブニングが流れてきた

そのテーマをきっかけに俺は腰掛けていたベットから立ち上がる

横には俺と一緒にNBA 2K9に興じていた圭司が（俺がホークスで圭司がラプターズ。残念ながらクリス・ボッシュを止められず102-108で俺の負け）千明の言葉に身震いしていて気持ち悪い

でもって千明は俺達の後ろで顎を枕に乘せうつ伏せになりながら、買ってきたばかりらしい音楽雑誌を読んでいた

この部屋の主は一応俺のだが昔から出入りしていた二人はまるで自分の部屋のようにリラックスしていて

だが俺も千明や圭司の部屋に行くとこんな感じだし

……まあ、要はいつもの休日の風景ってヤツだった

「……さて、腹減ったな。おまえ等もだろ？ほれ、金出せ金」

「あ、はいはい。今出す。ちょい待って」

俺の言葉に千明はポケットからチェックの小銭入れを出し百五十円を小銭入れから取り出した

その百五十円を受け取り圭司にも催促

だが圭司は一向に取りだそうとしない
それどころかふてぶてしい顔で言つてのけた

「俺試合勝ったからお前の奢りな」

「よしじゃあお前は納豆ご飯だ」

「すいません！！今出します！！」

まあ強気に出たところで所詮は圭司ってわけだが

「今日の昼、ラーメンらしいんだが味噌と醤油どっちがいい？」

「わたし醤油」

「俺も」

「りょーかい」

二人合わせて三百円分を手にしなから部屋を出てふと、この昼飯制度が始まったのはいつだっけ……？と思い出す

俺達が誰かの家で集まる時はたいてい午前から午後までずっとグダグダしてるのでその家のお昼をご相伴頂く事が多かった

勿論ご近所さんだし、帰っても良いのだけど。どうやら親同士で昼飯作るの楽になるからと取り決めがあつたらしく俺達が遊びに行った家で昼を出すと決まっていたらしい

だが、ある時なんだかんだで三回連続千明の家つてのが続いた

んで、その時にさすがに申し訳ないからと、おかんが300円愛梨さんに渡すようにと俺に持たせて、さらに合わせたように圭司も300円渡すように言われていたらしい

そこで終わりの筈が今度はたまたま俺んちで千明と二人で遊ぶ事になった時に、愛梨さんは千明に300円持たせた

そこから始まったのだ。この良く考えると金が回ってるだけであまり意味のないシステムは

今では経なくても良い紆余曲折を経て昼を頂く時は150円。これが決まり事になっていた

部屋の前の階段を下りてすぐの相変わらず部屋に不釣り合いにでか

いテーブルに食器棚とやっぱ家は庶民何だな……。と思わせる台所には珍しく休日だというのに午前中に起きてきたねーちゃんが気の抜けたパジャマ姿で立っていて、ラーメンに入れるであろうネギをカット中

「おかんは？」

「メイク中。アキとけー何が良いつて？」

「ダブルで醤油」

「じゃああんたそのどんぶりにスープのヤツ入れといて」

俺がやるなら聞かなくてよくねえ……。？とのツッコミは自重

大人しくラーメンのスープの元をどんぶりに入れるという作業に取り掛り始めた時にふと思いつく

「ねーちゃん」

「あん？」

「今度一人暮らしじゃん？」

「なに？お姉様がいないと寂しいか？」

「いや、別に」

「……つまらん弟よのう」

袖を目元に当ておいおいと嘆く姉に、俺は素朴な疑問をぶつけた

「ラーメン、そば、うどん以外の料理。……出来んの？」

その質問にねーちゃんは嘆く姿勢のままぴたりと止まり、数秒後

「おいおい、冗談は頭だけにしておけブラザー。麺の達人に向かつてなんて言った？」

と、両手のひらを天に向け、そばを向きながらそう仰った

聞き捨てならない言葉も入っていたが明らかに苦し紛れなのでスルーしてこれ見よがしに溜め息をついてやる

「なっ、なにさそのため息は！？あんたこそどーなのよ！？」

「はっ……全くわかつちゃいねえ。姉貴、あんたは何一つしらねえな。昨日の晩飯誰が作ったと思う……？」

俺のその言葉に姉貴はま、まさか……数歩と後ずさる

「あ、あんたが作ったっていうの……？」

「いや、おかんだけど」

「ば、ばかなって、うおい！！」

「おっと勘違いなさるな？サラダを作ったのは俺……俺だっ……！！」

「あたしにも出来るわそんなん！！」

「あ、アイツ等呼んでこなきゃ……」

「おおお……。臆面もなく逃げやがった……」

その言葉を見殺し階段を上りながら、まったく。姉をからかうたあ誰に似たんだ……と呟く姉に告げる

「鍋、ふきこぼれかけてんぞ」

「あ……？ぬあああ！？」

叫ぶ姉を置いて二人とおかんを呼びに行く

ついでに言つとその日のラーメンは明らかにのびていて不味かった

A C T ・入試3週間前（後書き）

次回はA C T ・合格発表3日後

ACT・2（前書き）

いろいろ省きます

ACT・2

結論から言うと俺たちはなんの捻りもなく黒商に受かった

そこそこに受験勉強をして、そこそこに入試でいい点を取り、そこそこに家族に誉められた。そんな感じ

俺たちそれぞれの得意分野が違ったってのは大きかったかもしれない
三人で教えあうこともできた

俺は英語

千明は社会

後の担当はしつくり来ないが圭司だった

なんかたまにいるような本当に勉強嫌いなのに数学系の得意な奴
圭司はそんなやつなのだ

それでまあ特に目を輝かせることもなく高校の説明会に行き、チャリのかごに入りきらない教科書やらなんやらにうんざりしつつももバッチリ買いそろえ、大して希望に満ち溢れなかった入学式はつづがなく行われた

ここまでは本当に快調だった。本当に

だけど俺は知っている。そういうときに俺たちはとんでもない目にあつたりするもんなんだって

……そりやまあ生まれてからの付き合いですからね

夜の公園ってのは不思議と周りから切り離されてしまった空間のよう
うに感じるのは俺だけだろうか

周りとの区切りは錆びた緑のフェンスだけで、こつちとあつちに限
りなく同じ筈なのに、間には薄いが確かな壁があるように思えるそ
んな感覚

そんな事を俺は入り口によく立っている、自転車止めかなんかの鉄
パイプのさえ切りを股抜きするようにボールを通す千明を見る度
に考える

この公園は昔っから千明が練習に使っている所だ

んで、諸事情により圭司は結構。俺は最近はたまに千明に引っぱり
出されてここに

練習、といつてもそんな気合いの入った物ではなく、なんとなくパス
ス練したり、よくテレビとかでやるリフティングしつつ相手にパス
しあつて落とした方が負けつてやつとか練習というよりボール遊び
の方が近いだろう

サッカーしないで全力で鬼ごっこすることもざらだし

ただ、そういうのは二人以上ではじめて成立する遊びであつて千明
がひとりの時は遊具を使つて練習する

40M四方のデカイような小さいようなこの公園には御時世に負け
ず立て直さなれた遊具が結構あり、ジャングルジムの隙間をキック
ターゲットに見立てたり、登り棒の間をドリブルしたりと。千明は

もしかしたら今でも近所の子供より遊具を活用してるかもしれない
そして今日俺を呼び出した千明は、遊具の中でも一番の古株である
ドームに穴の開いた奴にだいたい20Mくらい手前からボール一個
半ぶん開いた穴目掛けボールを蹴っていた

「びつくりだったねえ」

穴めがけて飛んでいったボールが見事に入り、中でボールの跳ねる
音が反響でいつもの数倍大きくなったところで千明はベンチに座っ
ていた俺を振り返った

その顔は悲しみでもなく焦りでもなく、ただただ今日分かったこと
に驚いているだけのような顔

千明が悲しみの表情で無いのに俺だけ悲嘆にくれる……ってのも違
うので俺はなるだけ表情を平静に保つようにする

「まあ、なあ……。まさか、なあ」

「そうだねえ。まさか、ねえ……」

俺の溜め息混じりの言葉に千明も頷く

今日行われた部紹介をふくめた上級生との対面式
そこで一つわかったことがある

そのわかった事というのがもう大問題も大問題で

それは千明に怒りや悲しみを通り越してなんかもう呆れさせるくら

いのもので

「まさか――

――サッカー部が廃部だなんて」

あたし、どうしたら良いんだろ。と
呟きながらボールを拾いに行く千明に俺は声をかけられなかった

ACT・3（前書き）

筆者も天パなんですよねこれが

ACT・3

「で、俺の所に来たってわけか。ギャツハッハ。つくづくアレだな。お前ら千明大好きだな」

「そりゃまあ……。でもそういうよっさんだつてめっちゃかわいがつてるじゃん」

「たりめーだろーが。あんだけカワイイ妹分を蔑ろにするくらいだつたらうちのクラスの女全部と縁切ってもいいね」

「女もなにも工業だから数えるくらいしかないだろ」

バレたかとカラカラと笑うよっさんに相変わらずだなあなんて思っ
てしまう

小さい頃からある黒いデスク、いつも隅に置まれた布団、年中出し
っぱなしのコタツだけの殺風景な部屋もそうだがもつと変わらない
のはこの人の本質
小さい時からずっと変わらない

にしてもお前が自分からサッカーをねえ……とニヤニヤする、コタ
ツの対面でみかんを向く兄貴分

……この人がこういう笑いをする時つてのはだいたい絶好のから
かいネタを見つけたときつて決まってる

結果

「そーかそーかズッコケ三人組のおまえ等もついに一組のカップル

とその友人ってな感じでギクシャクし始める時が来たか」

と、やっぱり微妙にあらぬ事を言いなさる

ただまあ付き合いの長いだけあって、からかわれた場合うまくやり過ぐす方法つてのも俺は知ってたりするわけで

「いやいや結論を早まりなさるなよ。確かに千明はカワイイですよ？文句なしにカワイイです。髪さらっさらだし顔ちっさいし」

よっさんにからかわれかけてる時は、心に無くともこういう風に半分くらい認めてあげりゃあいいのだ

ただ実際、千明をかわいくないと言う奴はきつとアレだ。ガチの熟女好きとか、デブ専とか、あるいはそもそも女はお呼びでない……等々。なんかもう好みがズレてるタイプだろう

「ん、なんだサラッと認めやがって。つまんねえ奴だな、嘘でも」
「ばっ、バカ言うんじゃないよー！俺とアイツはそんなんじゃない——」
「なんてうれし恥ずかしな反応しろよ」

でもって例に漏れずそんな感じでよっさんはつまんなそうな反応をしてくださる

ただ、これからもうまくやっていきたい相手に、やっぱつまんねえヤツ……。と心の底からの表情をされるのだけは悲しむべきか……

「そついうのは弟さんの役目じゃん。ついでにいたぶってみれば？」

「馬鹿か。喜ばせるだけじゃねえか」

「……兄貴に罵られてもなんか？」

「ああ。……俺あ心配だね。全く無理やりなキャラ付け程恐ろしい物はねえやな」

「……え、キャラ作ってたの？」

「まあよ。千明は見た目が人生の勝ち組だし、お前は太泉ってか……あれだよ、もうそこまでいけば林家ペーだろ？……だがアイツにはそういうの無いんだよな。全然。もう致命的に薄かったんだよ。キャラが。俺に似てれば……なんて贅沢言わん。たが、せめてお前みたいに頭に近代芸術しよってりやまだ救われたのにな……」

な、なんだろう。こんなに痛ましい顔をしたよっさんなのに何で俺は一発殴りたくなるんだろう

「で、朝の出席で名前呼ばれなかったり、ファミレスでアイツの料理だけ厨房にほっぽとかれてそれどころか一緒に行った俺らも全然気付かなくて、で圭司は言い出しづらくなっちゃって。皆食い終わりがける頃になんとかお袋が気付いたが、出てきたのは長い時間暖房の直撃をうけてパッサパサになった海鮮丼だった等々。何気ない日常でどこことなく蔑ろにされてきたんだ」

遠い目をしながらアイツ泣きながら海鮮丼食ってたな……とミカンを剥くよっさん

「そしてアイツは……ある日人生を楽しむ秘訣を記した秘伝書『全

てがMになる』に出会ってしまった……その時にあいつの運命は決まったんだろうさ」

「じゃあなにか？アイツは無理して自分はMだと思い込んで人生の苦境に耐えてんのか？」

なんだ。目覚めたんじゃないのか
確かにあの不自然なまでのMっぷりには無理があるし

からかい相手としてはつまらんが幼なじみとしては少しホッとしてりして

「いや、最初は無理してたんだろうが……。見てると最近のMっぷりはガチじゃねえかな、と……」

「
……」

「……あ、お茶注いでやるか？」

「……う、うん。頼みます」

なんとなく圭司にはこれからちょっとだけ優しくしてあげようと思いました

あれ？いじめてやった方が優しさなのか……？

Mだからいたぶったほうが本望なのか……？

どうでもいいことに悩む俺によっさんは仕切り直すように、さて……と呟き

「で、なんでなんだ？まさか友情に絆されたって訳でも無いだろ」

などとまだ引つ張る気満々

俺としちゃあ別に言っちゃっても良いけど言ったところでどうなるわけでもないし

とりあえずお茶を濁すことにした

「そのまさかだよ。圭司と千明と一緒に何かできる機会も限られてるしな」

「ありえねえな。お前はターゲットの女 自分 女 男の不等式が確立されてっから」

「……千明がいるじゃん」

「おまえさっき千明は無いつて言っただけだ」

異議あり！！との勢いでビシッと指を指してくれやがるよっさん
変なところだけ証拠に採用してくれやがるなあオイ

そしてよっさんそのまま指を指したままぶつぶつと考え込む

……………そして私は思い出したのです

この愛すべき兄貴分は先程、どうあがこうと誤魔化しようの無いほどに明確な宣戦布告をしてきた事を

「とお」

指先をクキつとな

「っ！？いつてええええ！！？ゆ、指があ！！指がああ！！な、なにしゃがる！！あ、でも痛みでなんか思いついたありがとう！！」

「お、おう」

「この痛みの勢いのまま言っけどアレだろ！！お前、狙いは黒商の10番だな！！」

「す、すげえな……！？」

選択肢はさしてないとは痛みで正解を導き出すとは……
もしかして……

「ったー指立て伏せ始めてなかったら本格的にイッてたな……。……。
……オイ、言つとくがもう一本やったところで俺はなにも思い付かんぞ」

「……すいません」

「あと天罰でお前後であれな。『我こそはアンダルシアの剣なり！！』って言いながら30cm物差し振りかざす刑」

「うわ！！死んでも嫌だそれ！！」

「大丈夫だって、前節から振付まで全部プロデュースしてやるよ」

「完成度の心配とかじゃないから！！もつと根本的なところから！！」

「根本的……？しょうがねえな。ちゃんと丸めた新聞紙とかで取っ手つけてやるよ」

「剣の根元的な意味じゃねーから！！さてはただのバカだな！？」

「うつせえなあ……。安心しろ最悪愛梨さんとうちのお袋とやつみ姉ならなんかこう微笑みと拍手くれっから」

「え、わざわざそのために3家集めるのか！？」

しかも拍手つて逆に最悪じゃ……

ちなみにやつみはうちの姉の名前

ついでに言つと姉貴とよっさんはラブラブです。えっらいラブラブです

別に付き合つてるとか無いんですが、なんかラブラブです

二人がイチヤイチヤしてるのを見るたび千明総統は大変機嫌が悪くなるので精神的にだけではなく実害まで出てこちらは大変迷惑します

にしても指の痛みも治まつたらしい今のよっさんの笑顔つたらないまあ流れとはいえ見事に狙い通り答えを引き出されたわけだ

よっばど俺がそついう話をする事が面白いらしい

でもあの笑顔は単純に面白がる笑みではない、ような……？

違和感を覚える俺に考える暇を与えず、よっさんは膝をパンと叩き勢い良く叩きつける

「じゃあ、善は急げ、だ。さつさと立て。でかけっぞ」

「出掛けるって……どこに？」

「決まってるんだろ。お前の愛しの10番さんのとこだよ」

「あ、なる程な……。じゃねえよオイ！！な、なに！？本気！？」

あたりめえだろがと笑うよっさんの笑顔を見てホントに今更違和感に気づいた

よっさんのこの笑顔は今のこの時の為笑っているのではなく、これからしばらく先まで笑いの種になるモノを見つけたからの喜びの笑みで

つまり格好のネタを見つけた時の笑いだったということに

ACT・4（前書き）

締め方に失敗した気がします

ACT・4

「で、どこに行くんだ？」

「何回言わせんだ。10番のそこだったの」

……だからそれは答えになってねえ

そんな事を繰り返しながら15分

俺達は日曜だからかいつもより車通りの多い国道沿いを歩いていた

この県じゃあ微妙に都会気味の町とはいえ、隣県の都市らしい都市と比べたらぜんぜん田舎なので、何件か大型店舗が軒を連ねるこの道は確実にこの町のメインストリートである

メインストリートと言っても歩く人影はまばら、田舎は基本渋滞せず移動距離が長いため移動はもっぱら自転車、原付、自動車つてのがデフォだったのをつくづく感じさせる

そんな中歩く俺とよっさん

別に街中をポツンと二人で歩く事を気にするようなセンチメンタルジャーニーな訳でも無いんですけど

なんとなくーく感じる居心地の悪さは否めないわけでした

そりゃ別によっさんと歩くのが苦手って訳ではなく

……ただ、なんか若干アイドルでも通用しそうな兄ちゃんの隣に立つのは居たたまれないというか……

そんな悩みの種、よっさんは自分の高校の部活で決まっているらし

いデカめの緑白のプーマのジャージ

着る人によっちゃあ田舎のヤンキーってかDQNっぽくもあるが、ぶっちゃけよっさん短髪でめっちゃ顔が良いのでむしろ爽やかに見える

つくづく思うイケメンはずるい

フツの服もイケメンが着ると3倍かつこよく見える
なんだシャアか、シャアなのか

「メガ粒子砲暴発しまえこの赤い彗星」

「……？何言つてんだお前」

くっ……わけわかんねーって顔もイケメンだ
てかなんだ。千明も姉貴もやっぱアレか、顔か、顔なのか

「顔なんて飾りなんです。女にはそれがわからんのですよ」

「やっぱ何言つてんのかわかんねえ……。が、とりあえずそれは男もだと思っがな」

……仰る通りで

まあ、とりあえず行き先については教えてくれそうに無いので放置
決定

話を本題に戻すことにした

「で、さあ。話だいがそれちまつてこんな状況になっちゃったけど。部ってやっぱ最初は同好会みたいなのから始めんのか？」

部紹介でサッカー部が無く、何でかなー？大会かなんかなのかなと担任の先生に聞いた

そしたら

「う、うん。あのね？サッカー部……廃部になっちゃったんだよねとかなんとか

ついでにその瞬間俺の時間が止まって、先輩の前での一発芸が散々な出来になったことをここに記す。

ちなみに俺と千明、圭司はクラスが違い二人も同じ様なタイミングで聞いたらしい
んで、二人も同じ様な結果になった事もここに記す。

もしかしたら大惨事になってた奴らにもいるのかも

俺達は慌ててサッカー部について聞いたが、どの先生も

「あー、うん。なんてゆうか。……力の代償？」

とか

「まあ、なるようにしかなかったのさ」

等々

廃部になった理由はイマイチよくわからなかった

少し前までの俺ならここであきらめていたかもしれない

確かに半年前までは別にサッカー出来なかったら違う事でもイイじゃん

俺達の可能性は無限大だぜっ！！

などと考えてたりもしました

でも今更。まあ、サッカー部がない？なら弓道をやれば良いじゃないなどとマリー・アントワネット理論ではいかないわけで

つい一昨日の出来事なので、千明達とろくに話し合ったりもしていないのだが

俺としては某だいぶ前の野球漫画や今やってるバスケット漫画のように同好会からスタートってのもありなのかなーとか考えたりもしていた

で、とりあえず相談してみようと思ったのはよっさん
よっさんは昔頃から何かと助けてくれたり後押しをしてくれた素晴らしい兄貴分だからである

代表的なのでいくと千明のヒーローになったり、とか

小学生つてのは時として異分子に対して徹底的に冷酷であったりする。例えば少しでもクラスメイトと違う特徴を持ったヤツが居た場合。そいつには無慈悲で、容赦も救いもないような攻撃が向けられることもある

……ざっくりいうとありがちな事に青い目とか、金も混じった茶髪

とか、クォーターとしての身体的特徴を持った千明は仲間外れにされていたわけだ

幸い俺達と仲良くはあったし、酷いいじめを受けていたって事も無かった……と、思う。思いたい（俺と圭司はクラスが違った。小学校つてのは別の教室は他国同士みたいな感覚じゃないだろうか。暗黙の了解で情報規制が出来てたり）

……このことがキツカケになって俺が千明に対してずっと持っている『負い目』もある

ただ、千明の周りには良い人は沢山いた
愛梨さんは優しくすぎるくらい優しいし

そして、やっぱり千明にはMr. 主人公体質よっさんが居たし

主人公補正のかかるよっさんは妹分の境遇を知るやいなや、それをあらゆる意味で解決、俺達の目を覚まさせるとか人間関係の争いかそついうのを全部まとめて、話付けて納得させて取っ払って有無をいわず完璧に解決したのがよっさんで

千明はその時にもうそれはそれはよっさんを好きになったらしいサッカーを始めたきっかけも、サッカーをしてるとよっさんが構ってくれるからっていう、かわいい理由だとか

本人はよっさんが好きという所は公言してるが、よっさん並みに好きになったらしいサッカーとの出会いに関してはよっさんが関係ないとか千明は言い張る

ミーハーというか乙女っぽいのがいやなのか絶対認めないが。……
…なんつーかぶっちゃけバレバレだったし、愛梨さんが秘密だよ？

とか言いつつもとても楽しそうに話してくれたので多分間違いない
そんなわけで千明は十年來の初恋ってやつを追い続ける
助けてくれた時にしたらしいある約束を胸に秘めて

しかし、よっさんは基本木から降りれなくなった子猫から、横断歩
道を渡れないおばあちゃんまで、かなり見て見ぬ振りのできないお
人好しさんで

しかも自分の善行はすぐに忘れるっていうもうなんか聖人みたいな
所がある人なので

無いとは思うが忘れているかもしれない……そうだったらどうする
んだろうなあ。千明

……ああ、やべえ八つ当たりされるなあ。アイツ目つきキツいから
機嫌悪くなると恐いんだよなあ

「……おい。林家、お前人の話聞いてつか？」

「んあつ！？……ああ、ぶつちやけ世界3大珍味は言うほど美味く
無いよな」

「……何の話だそりゃ。お前な。んな適当な態度だったら俺はもつ
と適当やるぞ。あと美味く感じないのはおまえの舌が庶民だからだ」

心底呆れたよう言われるとかなり罪悪感が湧いてきた

「……すみません」

「わかりゃあ良いんだよ。ちゃんと聞いとけ？あんま何度も同じ話

するの好きじゃねーんだわ。俺」

「そりゃそうだ」

俺だったら相談に来た奴が全然話聞いてなかったらプツンだろう
見捨てないでくれるよっさんに感謝

「それで、だ」

改めて……と行った感じで見据えてくるよっさん
この人が人の目を真っ直ぐ見るときは7割が真面目なことで残り3
割がちゃんとおっこんでかすべったのカバーしての合図である

「お前等さ、高総体とか選手権とか出たいのか？」

「ん？……んー、どうだろ。個人的には微妙？」

「ほお？」

ユースを除く全てのサッカーに真面目に取り組む高校生の最終目標
と言える大会

もちろんサッカーをする以上普通なら出たくないわけが無く
その点、部が無いから作るうとしてまでサッカーをしたいと言ひ張
る俺は別にそういう出たくないという

おそらく単純な興味として疑問顔のよっさんに、俺は上手く自分の
考えてる事を伝えられるように少し考え込んだ

「……ぶっちゃけさ、俺アイツ等となんかしたいだけなんだよね。
正直サッカーだろうがセパタクローだろうが何でもいいんだよ」

むしろ個人的にはサッカーはご遠慮申し上げたい所なんですが、ここは俺の意見はスルーするべきでしょう

だって千明が全てを掛けられる可能性を見つけてしまったのだからしかし、よっさんには千明のサッカーの事については話していない

よっさんが知っているのは圭司が黒商の10番の話を俺たちに話した事

その10番はおそらく練習試合では手を抜いていたかなんかで、実は凄い上手かったこと

後は黒商の10番が実は、ずばーんと俺の好みだって事……がさつき謎の遺伝的Mパワーでバレた

まあ、せいぜいこれくらいだ

よっさんに俺の事は仲の良い3人が入った高校にサッカー部が無く、駄々をこねる千明姫を宥める為にサッカー同好会とかを作ろうとしている弟分。しかしはあわよくば10番さんとお近づきになることを狙ってが本音……くらいに見えていると助かる

やる気の無いキャラで売ってきた俺が誰かの為に……ってのはなんか気恥ずかしいし、何より千明はよっさんにもう弱いところを見せたくは無いらしいし

なので実は事情を知らずサッカーを心底愛すよっさんに、『半端な気持ちでサッカーすんじゃねえ!!』とか、キレられるんじゃないかと内心びくびくしていた

さっきの俺の大会はどうでもいい発言だってその大会に全身全霊で望んでる、望みたい人達から見たらかなりカチンと来てもしかろうが

ない様な言い種だ

だが、全身全霊で望んでた筈のよっさんは俺の答えを聞くと怒るところかそれでこそみたいな表情で

「なら、よ」

「ん？」

——後になって思う。この時のよっさんの面白半分の言葉が少なからず俺達の……いや俺の人生を変えたんだろうつて

この提案が無かったらアイツ等と出会う事もきつと無かったし、俺も違う道を歩んでいたろう

ただ、その道がどうであれ、アイツ等とサッカーした時間がとてもかけがえの無いものだということは変わらない

「俺とお前らでよ。草サッカーチーム、作ってみねえか？」

後になって思い返す度に、この時行き交っていた車とか場所とかよっさんの表情とか、そーいう物は段々とうろ覚えになっていく

……それでも俺は、この時の空の青さだけは。ずっと忘れないだろう

ACT・4（後書き）

ようやく次にちよーっただけサッカーっぽい描写が……あるかも

幕間・千明の好きな選手（前書き）

今週中にもう一話

オリジナル選手は、さぶいば出るとかって人マジすんません
っ！か俺もその手の人間……..
バレ。。勝手に移籍させてごめんなさい……..

幕間・千明の好きな選手

「っしゃー!!さっすがモルフェオ!!」

「ふーん。……この選手上手いのか？」

「うまいよー。天才だねこの人は」

「でもさ、代表呼ばれて無くねえ？」

「……オイ天パ、ちよいそこに正座しろ」

「……な、なんだよ千明。そんなすこま」

「良いからしろつつってんだろ。お前の頭で風呂掃除すんぞ」

「す、すみません!!」

「……あんたさあ。まさか代表!!その国で一番上手い奴ら。とか思ってる？」

「え、違うの？」

「歯あ食いしばれこらあああ!!」

「あべしっ!!」

「……」

「……」

「ごめん……強く叩きすぎた……」

「……おう。反省してくれたなら構わん」

「……まあ、うん。あれよ。色々あんの、代表選考にも。……ごめん本当大丈夫？なんか赤くなってきてるんだけど……」

「……そーなのか？……気にすんな。テンポ悪くなるからサクサク行け」

「そ、そう？……例えばチームのコンセプトに合わなかったり、怪我がちだったり、監督と仲悪かったり。……モルフエオは性格的にあれだからだろうとは思うけど」

「ふーん。まあ基本監督が選ぶわけだからなあ。仲悪かったら出れんなそりゃ。……スポンサーとかの意向もありそうだしな」

「そうだね。スポンサーは無いと信じたいけどわかんないしね。……星占いで決めた方がまだましかな」

「は、星占い？そんな奴いんの？」

「いるいる。うわさだけど。後、選手の髪長いからって人も居た」

「部活かよ」

「だよねえ。だから必ずしも代表」その国最高の選手とは限らないの」

「成る程ねえ。じゃあ千明先生が日本代表に呼んで欲しい隠れ選手とかいんの？……あ、鼻血」

「あつ、あああ！……ごめんティッシュ切らしてんの！……今すぐ下から持ってくる！……」

「……………」

「……………」

「……千明？」

「……こ、こっち見ないでっ」

「……あのさあ」

「……わかってるわかってるからっ」

「……笑うとか失礼じゃないすか。鼻にティッシュ詰めてんのはあなたのせいなんですけどね」

「だからこっち見ないでっ……ふっ……ふふ………」

「……で、千明の呼んで欲しい選手とか居ねーの？」

「あ、えつとね。ミヤを呼んで欲しいかなーって。無理だってわか
ってるけどさ。でも私信じてる」

「ミヤって宮澤か？」

「そ、高校サッカー界に突如として現れたった2試合しか出てない
のに得点王攫っていつて、ハットトリックした試合にたまたま日本
観光に来てたカルチョの某ピンクのワンマン会長の目に止まって、
そのまま引っ張ってかれてセリエBに三年レンタルされて

帰って来たら好不調超激しいけど4シーズンで52ゴール31アシ
ストとかやって某青黒に目を付けられて18億で移籍して、でもな
んか怪我とか戦術的にそりが合わなくて2シーズン半ばでスペイン
のたまにジャイアントキリングしてたけどバレ。。が移籍しちゃっ
てグダグダになってた青白にレンタルされて復活して半年で8ゴー
ル6アシストとかやって買い取りオプションで買い取られて
戦術的にミヤ中心にしたからか20ゴールとかしちゃって遂に白い
巨人とか動き出した矢先に2回目の左膝十字靱帯断裂とかやつちゃ
ってそのまま引退した宮澤」

「……なげえ台詞お疲れ様」

「台詞に改行入れたの初めてだよ……」

「でも無理だろ。引退したじゃん」

「出来るって。まだ32いつてないんだよ？パス自体はめちやくち
や上手いしバルデラマみたいなプレーヤーに……」

「バルデラマだとキツくねえ？リケルメでさえ運動量ねえって言わ
れんだろ？お前が散々に見せて下さったビデオだと攻撃の時結構走

「ってんじゃん。バルドラマだとセンターサークルから動かんדר」

「よくあんたバルドラマとか覚えてたね」

「……同族だから」

「……まあ、でもドリブルしないミヤとか見たくは無いかどね」

「そーなん？」

「うん。ミヤの魅力はそりゃ無理だよってところからのドリブル突破とシュートをやったのけちゃう所だから。ドリブルないと魅力的には半減だよね」

「まあ東洋のレコバとか呼ばれたりしたしなあ。……顔的にも」

「うん。レコバの好不調が少し大人しいバージョンって感じ。……どうも私東洋のレコバって違和感あるんだよね。失礼だけど」

「それ俺も……なあ？」

「ねえ……？あ、知ってる？ミヤってこの県出身なんだよ」

「え、知らなかった」

「ちゃんと新聞とか読まなきゃだめじゃん。……もしや全国紙？」

「そ。お前んち地方紙だからな。つかお前スポーツ欄しか読まんדרどうせ」

「はあ？私他の所も目通してるし」

「え、マジで？」

「……占いとか」

「やっぱりな……」

ACT・5（前書き）

なんか長くなっ たんで一回区切ります

先週はまじ忙しかったんす。楽しみにしてくれてる方はあんな居な
いと思いますがホントすいませんでした

ACT・5

「……草サッカー？」

「おう。高校の大会にや出れねーが社会人の大会なら出れる。チーム登録は心配すんな。コネがある」

コネ……とはどういうツテなのか。中学の時に呼ばれたらしい県やら地方やらのトレセン（選抜的な奴）つながり？

……んー。まあいいか別に

「俺は別に構わんですよ。……でも」

よっさんは部活引退後で暇とはいえ、バイトやら進学……は工業だから無いかもしれんが就職とか。なんやかんやで色々忙しいんじゃないだろうか

「あー、就職とかの事は心配すんな。親父の実家の家具店継ぐ事に決まったから」

「へえ、そーなん？確か職人さんだったよな」

よっさんの親父さんの実家は日本家具製造を営む店である

完全オーダーメイドなので多少値が張るが、腕が滅茶苦茶良いので結構儲かってるらしい

なんとなく職人気質な所もあるよっさんだから、きつと上手く行くだろう

そんなわけで遊んどかなきゃ損なわけよ。と笑うよっさん
確かに高校生のうちに遊んどかなきゃ損だろうし、草サッカーなら
社会人になっても合間を縫って出来る

言葉を繋ぎながら、よっさんは一度軽く右足でボールを蹴る動作を
した

「俺としちゃあお前等と出来んならこれ以上はねえ。……千明がや
るっつーかどうかはわからねーけどな」

「いや、千明はやると思う……」
しかも返事はノータイムだろう

『あ、千明？』

『あー？』

『よっさんとサッカー——』

『やる！—！』

ぐらいの勢いだな確実に

「そーかあ？」

真面目にどうだろうと悩むよっさんに俺は千明の進む道の果てしな
さを感じる

頑張れ千明。先は長いぞ

「着いたぜ」

「ここ………？」

よっさんが足を止めたのはかなり大きい3階建ての建物だった

1階はレンガっぽい壁で、2階から上はクリーム色をした普通の家の壁

多分レンガの模様だけで素材自体は上と似たような壁をした1階は今はシャッターの下ろされている駐車場と大きな窓ガラス張りになっていて、そこから覗いてみるに……喫茶店だろうか

どうやら1階は喫茶店で上2階は住居ということらしい

喫茶店スペースの入口の上には『インテルナツィオナーレ・宮澤』と看板が

「青黒………？」

「ちげーよ。『インテルナツィオナーレ』自体は確か国際的って感じの意味だからな。そういうことだ」

「国際的？喫茶店が？……日本支店とか？」

こんな田舎に出店してわざわざ何の意味かと悩み始めた俺によっさんは呆れたように言う

「んなわけあるか。アレだよ。日本にいる外国人の人達の交流の場とかを兼ねれば良いってのがあるだけだろ」

「あ。なる程、だから『国際的』な」

確かに田舎だろうがちょこちょこ外人は見るし。こういうコンセプトの店もあるだろう
ふむ。がってん

「……でもなんでここにあの人が居るって知ってんの？」

「ここ、アイツってか沙江の家だから」

名前まで知ってんのかよ。美人だから女に飢えた男共で溢れ帰る工業の美少女ネットワークにでもひっかかてたのかもしれない
……そーいやあ名前先生とかに聞いて調べんのわすれてたなあ

「ストーカーは良くないぜ。よっさん」

「いや、アイツ俺の元カノだし」

「……は、はあああああああ！！！！？？？？」

まさかの……まさかの展開！！？？しかも『元』！？

こ、この野郎だいぶ前からうちの姉貴を頂きかけてるくせになんたる……！！

つーかあのスペックの女の子が元とは明らかに世の男共にケンカをうっている

「嘘だろ！？」

「おう。嘘」

「……からかわないでくださいお願いします」

あ……あせつたあー……

といいますか万事首尾良く行っで見事付き合えた場合よっさんと比べられるのは全てにおいてキツすぎるぞオイとか皮算用した俺が恥ずかしすぎる……

「まー、でもアイツの家ってのはホントだぜ」

まあうん。よっさんの元彼女じゃないのはわかった……わかったけど

「じゃあやつぱりなんで知ってんだよ」

名前が知られるくらいネットワークにひっかかっているってのも困る工業の皆さんわりとなりふり構わないし

「まあ完全に偶然だな。4ヶ月くらい前か？散歩中愛梨さんにたま会ってよ。んで、ここでお昼奢ってもらうことになって……もしたら、居た」

居た。って……

まあでも実際そうなんだろう多分愛梨さんにここの店を紹介されたってんなら辻褄合うし

……というかそうであって欲しい

「まあ、あれだ。とりあえず中入ろうぜ。……あと、最初に言ってくが沙江は中身結構アレだからな」

「……アレ、とな？」

そ、それはどういう……

「こんにちは」

俺に返事を返すことなく、カランカランと音を鳴らしながらよっさん慣れた感じで中に入っていく

「……うん」

気にしてもしょうがないし、とりあえず俺も中に入ってみることにした

「あ、いらっしやいよっくん。久しぶりだね」

俺達を明るい声で出迎えてくれたのはカウンターの奥で皿洗いをしていた背が高くすらっとして、真っ黒で長い髪をした綺麗なお姉さんだった

余計な物の無い真っ白いブラウス。首元にはネックレスが見える。下はいくつかポケットのついた茶色いロングスカート

その上で黒い腰下からのエプロンをしているので喫茶店のマスターというよりまるでシェフのようだ

切れ長系の目と形の良い口元。そして整ってはいるが髪の毛先の跳ね方が沙江……？さんに似ているのでどうやら血縁の人らしい
多分20代後半だろうしおそろくお姉さんかそこいらだろう

「どーも亜里沙さん」と、よっさんが挨拶をしている間に周りをぐるっと見回す

足元は茶色の木の床で、歩く度にギツギツと軽く軋む音がする
でも、ボロいとかいう訳じゃなく、きつとそういう材質の木なんだ

ろう

テーブルは徹底的に角を配した丸いデザイン。椅子も含めて全て白色系の木で出来ていた

けどお姉さんが中に居るカウンターは黒くシックなデザインで明らかにそういった料理店向きの趣を出すために作られた物だろう

そしてそんなカウンターにはさっきまで唯一お客さんだったらしい女の子が

どうやら小学生くらいの外人。恐らく東欧系っぽい横顔のブロンドの子が床に足の届かない椅子に座り、足をパタパタとしながらオンラインジューズをチューツとしつつ、こちらに視線を向けるような動作は欠片もなく、カウンター奥の天井付近にあるテレビでサッカー中継を見ていた

「私寂しかったなー、よっくん。焦らすなんてホントに女つたらしだね」

「勘弁してくださいよ。新しい常連候補連れてきたからチャラって事で」

「あ、ホントだ。……うん。お客さん連れてきてくれたからチャラにしてあげる」

そこでお姉さんと完璧に目が合ってしまった

……ちょっとドキツとしたりして

「あ、どうも……」

俺のどもった全くなつてない挨拶も意に介さず、どうしたらこんな笑顔が出来るのかって位に人を明るくする笑顔を亜里沙さんというらしいお姉さんは返してくれる

「よろしくね。ご贔負にしてくれると嬉しいかな」

ええ、今の笑顔を向けられたら他に選択肢なんてございません

「じゃー、まあアレだ。座ろうぜ。亜里沙さん、適当に昼飯お願いします」

「はい。承りました。ランチは550円だけど、いい？」

「構わんす」

よっさんは返事をしながらカウンタ………って………な、なぜ女の子の方に行く!?

「よ、レン」

俺の戸惑いに気付かないよっさん
女の子に至って気軽に後ろから声をかけた

「……………」

しかし、返事はない

「おい、レン」

「……………」

振り向きもしない

「なあ、エレン」

「……………」

返事はない。ただの人違いのようだ

「……あのさあよっさん。ターゲットが幼女ってのはもうなんか頑張っ
て下さいって感じだけどナンパするにゃあ人違い系はレベルた
けーんでないの？」

「ちげーよ！！……………あー、くっそ。ホントに頑固だな」

どんだけ好きなんだよ…………。と訳の分からない眩きを残し溜め息を
つきつつ、よっさんは女の子に向き直る

「あー、先に言っときます。亜里沙さんすんません」

「ん。大丈夫。大丈夫。沙江起こすぐらいの勢いで行きなさい」

通じ合う二人

微妙に疎外感な俺

というか起こすくらいってなんのはな——

「ニコのプレーは世界——イイイイイイ——！！」

「つつつつつ！？」

そしてよっさんの地獄の叫びも真っ青なその声で世界がつか店が、
揺れた

あまりの爆発的騒音にとっさに耳を抑える俺とは対極的に涼しい顔して包丁を操る亜里沙さんはどういつ耳をしてるのか
そして騒音に紛れながらも二階からどたんという何かが落ちたような音

しかし、この中で聞き取れるとは俺もどういつ耳をしてるのか

「イイイイイイイイ……………」

最後の最後まで絞り尽くして下さりやがった全く持ってはた迷惑な叫びが終わり

ぜーぜーと息を切らすよっさんに、俺がうつせえわあああ……！
とこれまたうるさいツツコミを入れようと息を吸った瞬間

「あ、よーじ兄さんじゃないですか」

と、今更ながら女の子はゆっくりと振り向く
さっきの騒音を間近で受けたはずのその顔は、しかしどこことなく楽しそうだった

てか日本語うまっ

まるで生粋の日本人のような発音をする彼女は満足そうに頷き、膝に手を突き息を整えるよっさんをポンポンと叩く

「さすがよーじ兄さん。サッカーをよくわかってますねー」

「あ…………ぜー…………はー…………ったり…………ぜー…………ま…………はー…………よ」

「ですよー。ニコ様は最高のMFです。なにより私のお兄様と同じ名前ですしねっ」

「はぁ……………そー……………はぁっ…ひ…はぁっ……………だな」

はぁはぁ言ってますがニュアンスが全然違いますのでご容赦下さい

……………てかどんだけ女（の子）の知り合い居るんすか、よっさん

ACT・5（後書き）

次ようやく10番登場＆サッカーボールを蹴る……のはず……

暇だったらお付き合い下さい

ACT・6（前書き）

くそ！！ボール蹴るシーンにたどり着けん！！

ACT・6

「ところでよーじ兄さん。お隣のお兄さんは何方でしょう？」

どうにもこうにも理不尽な世の中を嘆く俺について、エレンちゃんと言つらしい女の子はよっさんに紹介を求めてくれた

こんな感じに相手から聞いてくれるとこちらとしても自己紹介しやすいが

こっちから会話を切り出すのが筋な気がして恥ずかしかったり

「あー、こいつは俺の弟みたいなもんだ」

エレンちゃんはよっさんの紹介を聞くとそうなんですかと頷き

「なら私にとつてもお兄さんみたいなものですね」

と可愛らしい笑顔をこぼしながらそんな事を言ってくれる

初対面なのに凄い気さくで大人な子だなーとか弁えもなく大人目線な自分をよそにエレンちゃんは椅子から降りて俺の方を向いて立つと先程との無邪気な笑みではなく、上品な笑みを浮かべ

「では改めまして。エレン・キルバーンと申します。気軽にレンとお呼び頂けたなら幸いです」

まるで洋画で見るようなスカートの裾を摘みお辞儀をする挨拶
エレンちゃんの周りだけ時代が巻き戻ったかのように洗練された一連の動作に少し圧倒されて

一瞬の戸惑いの後、なんかよくわからないけどいいもん見たなあ……
…なんて気分になってしまった
外国では実際に今もこんな挨拶をしている所もあるのか、それとも
エレンちゃん流のジョークだろうか

どうやら気さくで大人な上に礼儀まで正しいご様子のエレンちゃん
にこの俺はより気さくで礼儀正しいジェントルメンな自己紹介をしようか……と考えたが、例えば俺が映画で見るような大仰な挨拶をしたところで滑るだけなので無難にまとめる事にした

「宜しく。俺はいち——」

「——うるさいよお。よーじ君、マジしゃーらっぷって感じだよ
僕は」

「……やーっと降りてきた」

今までの人生で聞いたどんな声よりもやる気のないトーンの声で俺
の自己紹介は妨げられる

呆れた顔の亜里沙さんの視線を追い、自然と目で追った向かうカウ
ンターの奥

恐らく2階からの《家》に繋がるだろう階段から降りてきた白に水
色の縦線が描かれたこれ以上パジャマらしいパジャマなんてそうそ
うねーぜってくらいのパジャマを着て、髪はボサボサ、目元にはク
マ、その上で昼の一時手前の時点で寝起き然とし、のそのそと降り
てくる姿は………なんというか………そう、ダメ人間

だけど俺はそんな彼女に見覚えがあって……

見覚えがあつて……

あれー……？なんかダメっぷり加減がちょっとオーバーしてるよう
な……

「あのな。うるさいのは認めるがこんな真つ昼間に起きてねえお前
もどうかと思つぜ」

「だってアレだもん。僕お昼まで寝ないとなんかアレがアレになる
病気だし」

よっさんの珍しい正論っぽい言葉にもひらひらと手をふり聞く耳持
たずといった感じ

そのまま冷蔵庫の前まで歩いていった彼女にちょうど冷蔵庫の前に
陣取るエレンちゃんはぺこりと頭を下げた

「おはよーございます沙江ねーさん」

「おはよ、レンちゃん。またゴードンさんに黙ってきたの？」

挨拶を返しながら沙江さんは冷蔵庫からオレンジジュースを出し、
近くにあったコップに注ぐ

それお店の商品なんじゃ……。そんなもんか？

「しょうが無いんです。爺ったらここに来てまでミルクを……。あ
んな、あんなえげつの無い液体を飲ませようとしてくるんですよ！
オレンジジュースでの試合観戦が最高なのに……！」

……爺？…爺とな？爺とはあれか？超お嬢様とかが少しお年を召した使用人を呼ぶ時の通称か？

「……よっさん、エレンちゃんってお嬢様様なのか」

「お嬢様になんか恐れでもって抱いてんのか……？まあ、お前の言い方で言えばお嬢様様様くらいだ」

「ま、マジ………？」

「あの郊外のお屋敷の主人の孫だかだったはずだな。よくわかんねえが3年くらい日本に留学ってことらしい」

「あ、あの半端じゃなくでかい奴か………？」

よっさんはああ、と肯定し俺はうわぁ……郊外のお屋敷といえその時たま解放されている日本庭園を備えた巨大さもさることながら奥ゆかしい建て構えなのに年末辺りのハロウィンやら感謝祭やらクリスマスドレスアップがフィーバーっぷりが半端じゃなくて日本庭園共々観光名所となっている所

その日本家屋には隠居さんらしい外人の資産家がすんでいて祭り好きはその性格含め、かなり有名なお方だがまさかそのお孫さんが目の前にいるとは……

つかオレンジジュースとか飲むんだなあお嬢様って……とか意味わかんない所に感動してしまう俺

「今度さ、オレンジジュースと牛乳混ぜなよ。そうすればゴードンさんも何も言わないでしょ。嗚呼素晴らしき平和への道」

「…………沙江ねーさんそれ飲みますか？」

「やあだつ」

「でしょーね…………」

なんとなくお金持ちって事で気後れしそう（俺は既にしてます）なものだが沙江さんはそんな欠片は一切見せず注いだオレンジジュースに口を付けながらこれまた適当な返事をしてエレンちゃんを脱力させている辺り、どうやらこの人はそういう人らしい

「…………あのねえ沙江。お店の商品なんだからあんまり勝手に飲まないでって」

…………あ、やつば問題あるんだ。しかも亜里沙さんの呆れっぷりを見るに常習犯なんだろう

「だってさー。冷蔵庫に麦茶しか無いしさー。どうしても崩しきれないじゃん。麦茶<オレンジジュースの鋼の不等式。というか皆には黙ってたけど僕オレンジで出来てるから」

とか言いながら悪びれることもなく沙江さんは二杯目をグラスに注ぐ

「あつ、もう…………。ほんと、エレンちゃんの方が全然しっかりしてる」

「大丈夫だよ亜里沙ちゃん。僕はやれば出来る子だから」

「やった所を見たことがないけどね…………」

「うわ、滅茶苦茶運悪いんだね亜里沙ちゃん」

そこで亜里沙さんはため息を付きフライパンに向き直った。疲れたらしい

……なる程想像以上に中身がアレとはこういう……

と、無意識のうちにジーツと眺めてしまっていた俺と沙江さんの目があつた

「……………」

「……………」2秒程だろうか。なんとなく視線を外しづらくて見つめ合う俺と沙江さん

すると沙江さんは不意に深刻な表情になり

「ごめんなさいね。美少女で」

……とか、ほんつとーに申し訳なさそうにいう

「……………」この出会いが貴方の人生を狂わせてしまうかもしれない。僕の可愛さ故に……………」

しなを作つて憂うような表情は確かに可愛いんだけどさっきの見てしまった後だとも……

「……………」ないです」

「あらー？言うねえ君。ねえ、僕と付き合いたくないの？」

「……………え？」

「僕さ。なんていうのかな。ストレートな誉め言葉にメロメロになりがちなのよね。だから、誉めてくれれば——」

「——めちゃくちゃ可愛いです。一生狂っちゃいます。狂いまくり。クルクルですよ」

「あははっ。ありがとう。でもごめんなさい。付き合えないわ。だって私達お互いのこと、よく知らないから……………」

「ですよー。まだ会って一分たってないし

「だから……………ね？常連さんから始めましょう？」

照れたような笑顔は物凄いわざとらしくて、でもなんていうか……………それがいいというか……………

「……………喜んで」

俺の言葉で沙江さんは瞬間的に笑顔の質をがらつと変えた

「亜里沙ちゃん良かったねー。カモが一匹増えたよ」

「なにバカな事言ってるの。ごめんね。気を悪くしないで？」

「あ、いえぜんぜん」

亜里沙さんは完成したらしいイタリアンハンバーグを俺の前に起きながら物凄く申し訳無さそうに謝ってくる

いやいや、全然問題ないむしろ美人姉妹が見れて得した気分です

はい

「……あ、そうそう」

亜里沙さんはよっさんのハンバーグも出したところで何かを思い出したようにして、エレンちゃんと何かを話していた沙江さんを振り返る

「シン君達だね。さっき来てたの」

亜里沙さんの方を振り返る沙江さん。……だがシン君の名前が出たときにエレンちゃんまでビクツとしたのはなんでなのだろうか

「そーなの？なんで？」

「リフティング見せて欲しいんだって」

「えー……。著しくめんどくさいな……」

「そんな事言わない。沙江寝てたから後でもう一度来るようにって……あ、噂をすればってやつね」

「あー！！やっと沙江ねーちゃん起きたんだ！！」

外に視線を移した亜里沙さんと同時に店のドアがバーンと開けられ、エレンちゃんと同じくらいの年の子供が4、5人入ってくる

……同時に物凄い勢いでよっさんの後ろに隠れるエレンちゃん
気さくで明るい彼女はいずこかに消え、不安そうによっさんの影に隠れながら入ってきた奴らをじっとみるエレンちゃんに少し驚いて

しまった

よっさんはそんなエレンちゃんの頭をポンポンと叩くと、イタリアンハンバーグの続きに取り掛かる

よっさんのなれたような様子と、エレンちゃんを見て困ったように笑う亜里沙さん

どうやら別にアイツらにいじめられているとかではなく、ただの人見知りなのだろう。シン君一味は隠れてしまったエレンちゃんを気に留めることなく沙江さんに縋っていた

「ねー！！沙江ねーちゃんリフティングやってよ！！あのグルって足回すヤツとかー！！」

「だーるーいの。めんどくさいの。明日ね。明日」

「それ昨日言ったー」

「じゃあ明後日」

「学校でしょ」

「しょうがないな。僕が学校サボ――」

「――さ、え？」

「……るのは無理だから。……あー、ねえ、お父さんは？」

沙江さんは亜里沙さんを振り返る。そこで出てくるって事は二人のお父さんも相当サッカーが上手いのだろうか……

「一昨日話聞いてなかったの？今、イタリアよ」

い、イタリア？

「え、マジ？……うわー。もうホントタイミング悪いなあの人」

本当にだるそうに天を仰ぐ沙江さん

そんな沙江さんのパジャマの裾をちょいちょいとつまむ子がいた

「……………ん？」

それは、さっきまで隠れていたエレンちゃん。男の子達の輪の中に割り入っているエレンちゃんはとても恥ずかしそうで

「……………みたいの？」

問い掛けに、エレンちゃんは顔をあげずにコクコクとだけ頷く

「……………あー。もう、しょうがないな。可愛い女の子ってほんとずるいよね」

沙江さんも流石に無視できなかったらしい

エレンちゃんの頭をよっさんとは違う撫で方で二、三度こねくり回すと

「じゃあボール持ってくるから外で待ってな。お子ちゃま共」

と、言いつけて階段を上っていった

シン君一味はやった、と喜び次々と外に飛び出していく

しかし、一番最後に出ようとした子が何かを思い出したように帰ってきた

彼はエレンちゃんの前に立ち

「なんかわかんねーけど、ありがとうー!」

元氣よく礼を言った後、エレンちゃんの返事を待たず外に出ていった

「……あ、う」

その場で固まったままのエレンちゃん

こちらから表情が見えないが、よっさんがニヤニヤしてるのできつと悪いことではなかったんだろう

数秒して、エレンちゃんがカウンターに戻ってくる。うつむいた顔はもの凄く赤い

「よかったじゃねえかレン。シン君にありがとうっていわれたぜー」

「う、うるさいですよー!ーよーじ兄さん!ー!」

真っ赤になったエレンちゃんをさらに二言三言からかうよっさん

そんな二人をクスクス笑いながら眺める亜里沙さん

よくわからないが、その空気はとても暖かくて。俺は今日来たばかりだけどいつか溶け込めたらいいなと。なんとなくそう思った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8995f/>

ツータッチ・ファンタジスタ

2010年10月8日13時18分発行